

スーパーマンではない山崎泰広さんのお話を受け取って

瀬戸山陽子（東京医科大学・看護師・大学教員）

《スーパーマンではなかったことに親近感》

赤坂のカラオケルームでの「放課後」の時間に、「山崎さんがスーパーマンでなくてほっとした・・・」なんて、たいそう失礼なことをお伝えしてしまった者です。

今回の授業では、10代の留学中に脊椎損傷と脳挫傷という大変な出来事に遭いながら、米国の整ったリハビリ環境や、「“けがをする前と何も変わっていない。手段は変わるけれど、目標を変える必要はない”」と言うスタッフに会われて、文字通り“Double minority”を“Double speciality”にされて、それを存分に活かしてこられたお話に、とても引きこまれました。

それでもやはり、最初はスーパーマン…とってしまったのですが、お話を伺ううちに、実は辛いこともあったのだろうなあと感じ、僣越ながら勝手に親近感を覚えています。

《日米の障害学生が置かれた状況》

いま私は、障害を持ちながら高等教育機関で学んだ経験を持つ人(障害学生)に体験談を伺う研究に取り組んでいます。

統計データを見ると、高等教育機関で学ぶ全学生のうち障害を持つ学生の割合は、(障害の定義が異なるので単純な比較はできませんが)米英が約11%なのに対して、日本は0.1%にとどまります。

単に統計的な数値だけでなく、個々の障害学生の学びやすさは、もしかしたら山崎さんが学んでいらした頃から日米ではさらに差が開いてしまっているのではないかと感じました。

今回お話を伺っていて、山崎さんご自身は日本よりも米国のほうが暮らしやすかったのではないかと勝手に感じてしまったのですが、それでも日本でこんな風に色々なことを伝えてくださっているのが、現場の私たちが頑張らないわけにはいかない…という思いになっています。

《シーティングに、目から鱗》

授業以前にも、「シーティング」という言葉自体は聞いたことがあったのですが、実際お話を伺って、私は本当の意味でのシーティングの意義を何も知らなかったと今回思い知らされました。

シーティングの細やかさとその効果に、本当に目から鱗。スライドでは、適切なシーティングをされた後に、実にいい顔を見せるお子さんの表情が本当に印象的でした。逆に言うと、「仕方ない」という言葉で二次障害を起こしている人たちがいったいどのくらいいるのだろうと胸が痛みます。

どの業界も多かれ少なかれあるかもしれませんが、医療福祉の現場は、上の人たちの慣例や頭の固さに下が押されてしまうことがよくあります。また若手に志があっても、“いいもの”を知らない、具体的にどう動いていいかが分かりません。

そう思うと、シーティングもリハビリ病院の在り方も、海外を含めて良いお手本がまだあることを、頭の柔らかい学生たちにもっと知ってほしいという思いです。幸いにも私は少しだけ医療福祉系の学生に関わる機会があるので、微力ながら今回のことを伝えていきたいと思っています。

《最後に》

今回山崎さんのお話を伺って、改めて、日本の福祉や障害者、自助具・補助具にこびりついた「いけない」イメージを、もっと楽しく明るくかっこよくお洒落に、そしてもちろん効果的に快適に、変えていきたいなあと思いました。私自身ができることは微力ですが、それでも障害を持つ当事者として、また医療者の端くれとして、少しずつできることをしていこうという思いです。

「愛と友情のボストン」と「運命じゃない！」の2冊のご著書は、このレポートを書いている最中にやっとやっと私の手元に届きました。既にFacebookで身近な方から前評判を受け取っているのですが、これから楽しみに読ませて頂きます。今回は本当にどうもありがとうございました。